

義民祭祀の現代的変容
——唐津藩虹の松原一揆の義民富田才治と宝くじ——

原 英子^{*,**}

Changing Worship of a Public Spirited Peasant as God in Recent Decades:
TOMITA Saiji, Popular Leader in the 1771 Uprising Against the Karatsu
Domain's Agricultural Tax Oppression, Becomes a Famous Lottery God

HARA Eiko^{***}

Abstract

TOMITA Saiji was famous as a popular leader in the 1771 uprising against the Karatsu Domain's Agricultural Tax Oppression, called Niji-no-Matsubara Ikki. He was killed as the uprising's Leader along with two other persons by the Karatsu Domain's government in 1772. According to lore, after he died, his nanny took away his hair to her hometown. His shrine was established in 1827. Tomita Saiji has been deified as a god by the people living around the shrine.

The Tomita family operated a store providing tea leaves and access to the lottery. The store sold the winning lottery ticket in 2006, namely one 1st prize and two before and after prizes, and a 2nd prize, 400 million yen in total. The same thing occurred the following year as well. A reporter employed by weekly magazines wrote about these events and asked Mr. Tomita why his store could sell winning lottery tickets. Mr. Tomita said that he went to Tomita shrine to pray to win. The Tomita shrine thus became the location of the "lottery god." Presently, visitors write reports on their own internet sites about events like these. The result: A god's character also easily changes, fostered by the news of weekly magazines and internet information in modern times.

* 岩手県立大学盛岡短期大学部 ; Molioka Junior College, Iwate Prefectural University, Takizawa-city, Iwate Prefecture, 020-0693, kusaba@iwate-pu.ac.jp

** 九州大学大学院比較社会文化研究院公立大学研修員

キーワード：富田才治，富田神社，宝くじ，週刊誌，インターネット

Keywords: TOMITA Saiji, Tomita shrine, Lottery, weekly magazines, inter-net

I はじめに

佐賀県北部にあった唐津藩で、江戸時代の1771年、虹の松原一揆という一揆がおこった。その首謀者の一人とされる富田才治（1724-1772年）は、死後、神として富田神社に祀られている。

義民研究で知られる歴史学研究者の横山十四男は、1970年代に農民一揆の研究が盛んになったころ、「多数の農民のために一身をなげうって働いた百姓一揆の指導者および犠牲者」のことを「義民」といい、その義民についての伝承のことを「義民伝承」としてあつかった。その義民伝承とは、「地元の農民の間で、ひそかに、または公然と、親から子へと語り伝えられた、百姓一揆の義民についての物語や逸話」を指している。この時期、歴史学会でそうした義民や義民伝承に関心が高まったことを指摘している [横山 1985: 33,35]。さらに横山は、「義民」は、公式文書上は騒動の張本人とか発頭人と呼ばれ、法度を犯した農民一揆の指導者として扱われていたこと、しかし農民側は義民とか義人とかの呼称を使っていたと思われるが、資料的には確かめられていないこと、義民とか義人という言葉が一般的になるのは、明治維新以降のことであることを指摘している [横山 1985: 34]。

横山によると、義民伝承は、全国的に見ると共通性がみられるという。伝承残存の状態を、いくつかパターン分けできるという。ひとつは、文字化されずに口誦伝承の形で残っているもの、そして江戸時代のある時期に記録されて騒動記となっているもの、さらには潤色を加えられて、騒動物語となって残存しているものである [横山 1985: 35]。

歴史学研究者、宮崎克則によると、虹の松原一揆に関して直接的に著した史料は3点あり、そのなかのひとつ『虹浜騒動記』が書かれたのは、一揆があった82年後に写されたものだという [宮崎 1982: 320]。横山が指摘しているように、虹の松原一揆でも、当時の首謀者について一揆後すぐには公然と語るができなかったことが推測され、82年も経った時期に「騒動記」としてようやく書かれていることがわかる。そうした事情を背景に、富田才治の埋葬地等に関する伝承も複数の土地で採録されて報告されている。筆者はこれらの伝承について別稿まとめている [原 2023]。

こうした形で義民伝承として伝えられてきた虹ノ松原一揆と富田才治であるが、近年、これまでの義民にはあまり見ることがなかったと思われる事柄が発生している。富田神社が、宝くじがあたる神社として知られる神社となり、宝くじ当せんを願う参拝者が参拝にきているという現象がおきているのである。本稿ではこれについて、神に祀られた人が、いかにし

て人々への新たな信仰対象になっていくのか。江戸時代とは異なった、現代的メディアとの様相についてみていきたい。

II 虹の松原一揆と富田才治

まずは、富田神社の祭神富田才治とはいかなる人物なのかについて概略説明しておきたい。富田才治は1771年におこった虹ノ松原一揆での首謀者とされ、翌年に処刑された大庄屋である。

虹の松原一揆は、現在の佐賀県唐津市にある虹の松原で起こった農民を中心とした一揆であるが、宮崎克則によると、このとき農民だけではなく漁民も加わっている。残されている文書によってちがうが総勢1万人とか、2万3千人と書かれているという〔宮崎 1982 : 318〕。

唐津藩は、江戸時代になると、豊臣秀吉配下だった寺沢志摩守広高が領有した。しかし、寺沢氏は2代が統治したのち、その次に大久保氏が藩主となり、やはり2代の間統治した。その後も松平氏や土井氏、水野氏、小笠原氏というように譜代大名が短期間で交代する状況だった〔唐津市史編纂委員会 1962: 541-542〕。虹ノ松原一揆は土井氏の時代が終わり、水野氏が藩主となって10年目の出来事だった。水野氏は藩財政の窮乏打開のため貢租の増長政策を推進していた。無年貢地へ測量をして増収を図り、楮を植えさせた。こうした諸政策は、土井氏の時代まではおこなわれていなかったことで、藩領全域の農民・漁民が反対したのだという〔宮崎 1982 : 320-321; 唐津市史編纂委員会 1962: 592; 736-745〕。

唐津藩の水野の時代、1か村のみを支配していたのが小庄屋で、数か村から数十か村を集めたものを組といい、その組を束ねていたのが大庄屋であった。一揆で、農民や漁民たちが虹の松原に集合すると、唐津藩は6人の大庄屋を呼んで書状を農民に読み聞かせるように命じている。その中に富田才治が含まれていた〔宮崎 1982 : 336〕。

最終的には一揆の要求がほとんど認められたのであるが、その後富田才治を含む4名が自首した。1名が年少を理由に他の地へ流されたが、そのほかの3名は処刑された。富田才治の家族は他地へ追放された〔唐津市史編纂委員会 1962: 602-603〕。

概略このような経緯があった。

III 富田神社

佐賀県伊万里市には富田才治を祭祀する富田神社がある。近年、宝くじがあたるという評判の神社で、宝くじ当せんを祈願する人たちが絶えないようである。



【写真1】 富田神社への案内板 「宝くじ必当祈願」がご利益の1番目に書かれている。(佐賀県伊万里市富田神社入口 2022年11月13日 撮影者 原英子)

写真1は国道から分かれる三差路に立てられた看板である。看板には宝くじ必当祈願、金運、開運、頭首諸病治癒、それに合格祈願と種々のご利益が書いてある。看板の状態からみて、立ててからある程度の年数が経過していそうである。車で遠くからでもみえるような大きさの看板が、道の分岐点に立てられているので、このあたりの地理に疎い人でも、間違えないように気づかいがなされている。看板だけではなく、曲がるべき道の方には小さな紺色の旗も数本立てられている。この三差路にはバス停も設けられている。神社はバス停から歩いていける場所にあるので、バスの利用も可能である。

伊万里市の富田神社は、唐津市の虹の松原の西の端から20キロ以上南西方向に行った場所にある。一揆が起こった場所から少々離れている。富田才治は虹の松原の東南東にある平原村（現唐津市浜玉町）の大庄屋だったので、なぜ唐津西方の伊万里に富田神社があるのかと思うのであるが、そこは富田才治の乳母の郷里であったことから、才治の死後、1827年に建立されたということである [保坂 2004: 334]。地元では、才治の乳母は竹内タケという名前であったと言い伝えられている。また乳母タケの家は、今の富田神社の近くにあったといわれている。富田才治が亡くなったのが1772年なので、その55年後に神社が建てられたことになる。

その後、富田神社は1937年に社殿を新築しているが、このとき、才治の子孫が東京などからも呼ばれ、祭典に参加している [富田 1937: 81]。この祭典のときに造られた石灯籠が、今も社殿の前に2基立っている。



【写真2】 富田神社内部の拝殿。左側に持ち帰り用の小木刀が置いてある(①)。正面は奉納された小木刀(②)。(2022年11月13日 撮影者 原英子)



【写真3】 富田神社内部の拝殿の壁に貼られた当選状況を示す貼紙。もともとは宝くじ売場の店舗に貼られていたものらしく「おかげさまで当店より出ました」の文字が見える。(2022年11月13日 撮影者 原英子)

富田神社の祭祀に加わってきた神社付近の人の話によると、富田神社がある集落は、上と下の2区域に分かれていて、神社がある下(地区)の20軒ほどが富田神社の祭祀と関わっていて、上(地区)は祭祀に加わっていないのだという。富田才治の命日である旧暦3月11日に祭典を催している。参加者は神社付近の下(地区)の人たちなので、富田姓以外の人も入っている。順番に祭祀の当番が回ってくる。神官はおらず、下(地区)の人たちが4、5軒ずつ輪番で祭りの準備と運営をしてきた。以前は集落の人口も多かったので、8年に1回ほどのペースで当番がまわってきていたが、今は人口が減少し、高齢等で当番として参加できない世帯も出てきており、5、6年に1回のペースに早まっているのだという。

祭殿には富田才治の遺髪が奉納されているといわれているのだという。神社に置いてあったパンフレットによれば、遺髪は「鬻」だという。

富田神社のパンフレットには、祈願の方法も書かれている。それによると、拝殿の左側に置かれた箱のなかに小木刀が置いてある(写真2の①)。それを1本持ち帰り、祈願が成就したら返納するというものである。返納の際、自分で小木刀を1本つけて納めるということである。宝くじ等が当たったというお礼の言葉が書いてある小木刀がかなりな数奉納されていた(写真2の②)。また拝殿の壁には、どの宝くじの何等〇〇〇万円に当せんしたという紙が貼られていて、ご利益の効果が、参拝時に目につくようになっている(写真3)。

写真3の拝殿の壁に貼られている紙をよく見ると、「当店より出ました」と文字が書いてあるのが見える。「当店」とは、富田姓の人が営む茶葉販売店のことで、宝くじを扱っている。神社とは5キロ以上離れている。インターネットで富田神社を検索すると、ここで宝くじを買って富田神社にお参りするとよいなどと書かれた記事が目につく。

店舗に行くと、店の内外の壁に当せんを知らせる紙が壁いっぱい隙間なく貼られている。私が店を訪問した20分くらいの間にも、宝くじ類を買う人たちが何人も訪れていた。宝くじを買う人が多い時期はとても混雑するらしい。店舗の前には、宝くじ購入者専用の駐車場と通常時の駐車場と2か所に駐車場が用意されている。

店の人に、どこから購入者が来ているのかきいたら、特に売るときにどこから来たかをきかないのでわからないが、県外や時には東京の辺りからくる人もいるようだということであった。

IV 富田神社が宝くじ当せん祈願の神社になったきっかけ

富田神社が宝くじ当せん祈願の神社になったきっかけは2006年に、年末ジャンボ宝くじで、1等と前後賞合わせての3億円と、2等の1億円の合計4億円が、前述の富田姓の人が営む宝くじ売り場の店舗から出たことに始まっているようである。それが翌年の2007年の年末ジャンボ宝くじでも1等と前後賞合わせての3億円と、2等の1億円の合計4億円がでたのだという。当時、週刊誌がこの出来事を取り上げており、神社の壁にその記事が貼られている¹⁾。その記事のひとつ、2007年1月30日の『女性自身』によると1991年の年末ジャンボで1等6千万円と前後賞2千万円の2本を合わせた合計1億円のあたりを出して以来、合計が1億以上のあたりを9回出していることを報じている[『女性自身』2007年1月30日号]。ここで参拝者は週刊誌の記事を見ることにより過去にさかのぼってこの店が多くの高額当せんを出した店であることを知るようになる。あるいは、そういう情報をすでに得ている人たちは、それを確かめることになるだろう。

ところで、この高額当せんがよくでる宝くじ売り場と、富田神社の結びつきはどのようにはじまったのだろうか。2006年の『FLASH』(No.898 2006年1月16日発売)には、宝くじ売り場から高額当せんがでることについて、週刊誌の記者が店主に質問している部分が見られる。その時の店の主人の回答は、この2年高額当せんがなかったので、神社で賽銭を奮発したところ高額当せんが出たという記載がみられる。2006年のこの記事には、富田神社への言及はみられなかったが、2007年の『女性自身』の記事には、富田姓の店舗の宝くじ売り場と富田神社との関係が大きく取り上げられていた。店の主人が、年末ジャンボ発売の前に必ず、先祖ゆかりの富田神社に当せん祈願に行くのだが、この年、だいぶん賽銭を奮発したのだと書かれてある。その結果、2年連続の1等と前後賞、2等の合計4億円が売り場から出たのだという。また、記者が富田神社に実際に行ってみたという記事が付加されてい

1) 拝殿と、拝殿横にある集会所には、写真週刊誌『FLASH』(光文社 No.898 2006年1月16日発売)と、週刊誌『女性自身』(光文社 2007年1月30日号)の記事がそれぞれ壁に貼られている。

た。それによると記事が書かれた前の年の2006年1月に、宝くじに当せんした札に10万円を神社に奉納した人がいて、その時の手紙が拝殿に貼られていたというのである【『女性自身』2007年1月30日号】。宝くじの当せんを多く出してきた売り場と、富田神社を結びつけた記事が、週刊誌に書かれたことは注目される。

もう1点、この時の記事には、富田神社の祭神である富田才治と虹の松原一揆の説明もなされ、富田神社の由来が書かれていることも注目される【『女性自身』2007年1月30日号】。つまり義民としての富田才治と虹の松原一揆についての情報が、宝くじ当せん祈願の神社と結びつけられて、週刊誌という情報の媒体によって、全国に広まっていったことが推測される。

V おわりに：富田才治伝承の拡散と宝くじ

「富田神社」をインターネットで検索すると、富田神社で宝くじの当せん祈願をするとよく当たるといふ記事とともに、富田神社の縁起として、神社の写真とともに、富田才治と虹の松原一揆などの歴史に関する情報にも触れながらブログ等を書いているものが目につく。

義民として有名になった佐倉惣五郎と比較してみよう。佐倉は1653年に処刑されたが、その伝承の流布について、横山十四男は次のように考えている。まず事件後地元の村を中心とする限られた地域に、崇り神伝承が広がっていた。それが、宝暦年間、藩主が奉納をおこなったことにより、領内に広く流布されるとともに、殿様から手厚くもてなされている義民ということで、公然と流布され、伝承の筋書きが形成されるようになったと思われるという。それがいくつかの系統に分かれながらバリエーションを生み出し、芝居・歌舞伎の上演、講談・くどき等となっていったということである【横山 1985: 276】。歌舞伎の第1回上演は1851年で、義民ものとして扱われた。それが江戸と大阪で大当たりとなったという【横山 1985: 290】。佐倉の処刑から200年近く経過している時期の話である。

江戸時代の物語や伝承の広まり方と比べ、富田才治と一揆にまつわる伝承と宝くじ当せんのご利益は、全国に広がる広がり方が現代的である。宝くじの当せん祈願というご利益があるという情報は、初めは週刊誌等によって、広められた可能性は大きい。その後、インターネットの発達により、多くの人が宝くじ当せんを祈願に、参拝に訪れ、その体験談をネットに書いて情報として発信する。それを見た人が自分でもお参りに行き、その情報をインターネットに発信する。そうした場所になっているようである。

神社にお参りに行くと、これまでにあった宝くじについての情報とともに、富田神社の由来が書かれた縁起等も目につく。参拝者は、インターネット上でも、その由来をあらかじめ読むことはできるが、拝殿にそうした由来が書かれていると、改めて虹の松原一揆と祭神、富田才治について読み直し、学ぶことができるようになっている。その由来も、簡単に書か

れたパンフレットから、額に掲げられた細かい墨字の由来まで、詳細の程度が分かれた由来書がいくつか貼られたり掲げられたりしているので、参拝者は興味の種類によって、自由に選択できる。あるいは簡単なものから、より詳しく書かれたものに移りながら読むこともできる。もちろん読まないという選択肢もある。

お参りにいつてきたことを書いているウェブサイトの記事を閲覧すると、いくつか祭神富田才治と一揆について触れられている記事が書かれているのを目にすることができた。つまり、神社に貼ってあった由来記は、人によって受け止め方は違うだろうが、それなりに参拝者の関心をよぶ効果を發揮しているのではなかろうか。ほかの人のサイトを見て、現地に行き、体験談をサイトに載せることでまたほかの人の関心を誘う。富田才治と虹の松原一揆について、現代風にインターネットを経由して、宝くじ当せん祈願の神社であることの情報が広まるとともに、人々に祭神富田才治について、あるいは虹の松原一揆についての知識も、情報が与えられている一面があるのではなかろうか。

現代は、インターネットを通じて情報が拡散し、情報が人々に共有される面をもっている。こうしたところに、人を神に祀る風習についても、現代風の変化が起こっているとみることができる。

富田神社の場合、最初は週刊誌が取り上げた事から宝くじのご利益が神社と結びつけて注目され始めたようである。それが今日では、気軽に発信できるツールを通じて、人々は気楽に訪問経験を発信し、その情報を欲する人々に共有されている。「宝くじがあたる」という新しいご利益を付加された神様は、新しい情報形態によって、新しい祭祀のされ方に発展していつている。

参 考 文 献

唐津市史編纂委員会

1962 『唐津市史』唐津市刊行

富田光男

1937 『明和義民富田才治と其同志』鉄腸社塾版

原英子

2023 「歴史を記憶すること——虹ノ松原一揆と富田才治に関するそれぞれの歴史伝承——」
『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』25（印刷中）

宮崎克則

1982 「明和八年の「虹ノ松原」一揆」丸山雍成編『幕藩体制の新研究』文献出版 pp.317-
349

横山十四男

1985 『義民伝承の研究』 三一書房

『FLASH』

No.898 2006年1月16日発売 光文社

『女性自身』

2007年1月30日号 光文社

